

産教連通信

技術教育と家庭科教育のニュースレター

産業教育研究連盟発行
http://www.sankyoren.com

目次

□ 産教連の研究活動の成果を多くの人々で共有するために	1
□ シリーズ「学校現場はいま(13)」 当事者の思いを斟酌した教育条件の改善	編集部 2
□ 図書紹介	3
□ エッセイ「楽しく取り組んだ思い出」	小池一清 4
□ 報告「コメをめぐる話題」	藤木 勝 6
□ 連載「農園だより(52)」	赤木俊雄 9
□ 会員からの便り紹介	10
□ 常任委員会報告	11
□ 編集部ならびに事務局から	12

□ 産教連の研究活動の成果を多くの人々で共有するために

右下の写真は、2008年の夏、茨城県水戸市で開催された、産教連主催の全国大会（第57次技術教育・家庭科教育全国研究大会）での一コマです。この大会が開催された当時は、「産教連通信」とともに機関誌の「技術教室」も発行されていました。前述の写真は、会員向けに発行されていた「産教連通信」に掲載されていたものです。

「技術教室(技術教育)」誌はすでに電子データ化され、産教連のホームページで公開されていて、いろいろな形で活用されています。一方、「産教連通信」は一部が電子データ化されています。まだ電子データ化されていないものについて、有効活用の観点から、検討を進めることにしました。

新型コロナウイルスの関係で、研究活動も思うに任せない状況ですが、何とかこれを乗り切っていきたいと思いません。



過去の技術教育・家庭科教育全国研究大会から

当事者の思いを斟酌した教育条件の改善を

編集部

本シリーズ「学校現場はいま」の第12回で、現在、中教審(中央教育審議会)で審議が進められている「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」に関して、その内容の一部を紹介しました(前号を参照)。今回は、その後の検討状況の概略を報告します。

本年(2020年)10月末現在、諮問を受けた事項について、70ページを超える中間まとめ(「令和の日本型学校教育」の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現—)が提示され、20を超える関係諸団体からのヒアリングが集中的に実施されています。

ここでは、この中間まとめに記載された事項の中から、教師および教員組織のあり方にかかわる部分の一部を紹介しておきます。

まず、教員免許更新制については、「教師として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識・技能を身に付けることで、教師が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目的としているが、これまで、採用権者が実施する研修との重複などの負担感が課題として指摘されてきた」として、その問題点が冒頭部に記されています。

次に、教員の人材確保についても、「近年、採用倍率の低下や教師不足の深刻化など、必要な教師の確保に苦慮する例が生じており、教育の仕事に意欲を持つより多くの志望者の確保等が求められている」や「教師は、ICT等を駆使し、子供たちの個別最適な学びと、協働的な学びをつくり出すことのできる創造的で魅力ある仕事である。こうした教職の魅力についても、適切に認識される必要がある」をはじめとして、6項目にわたって記述されています。

年内には答申案の素案が提示され、おそらく年明けの早い時期に中教審総会で答申案が承認されるのではないかと考えられます。

こうしてみると、はからずも、今回のコロナ禍によって、学校教育をめぐる問題点が浮き彫りになったように思います。子どもの教育について、どこまで当事者目線で検討がなされているか、私たちは見守っていく必要があります。

図書紹介

『メートル法と日本の近代化』 吉田春雄著
四六判 216ページ 1,800円(本体) 現代書館 2019年9月刊

「英雄たちの選択」というTV番組がある。書評子はこの番組が好きで、ほぼ毎週視聴している。この番組では、日本の歴史に登場した、歴史を大きく変える決断をした英雄たちをおもに取り上げ、決断した際の心の葛藤を推し量り、その内容を専門家の考証に基づき、映像化して再現するという手法を採用している。そして、異なる分野の専門家がスタジオに集まり、歴史的決断の意味するところを掘り下げていくという番組である。

この番組で取り上げられる人物には、一般によく知られた人物もいれば、研究者などのその道の専門家には知られているものの、一般にはあまりなじみのない人物もいる。本書を手にしてページを繰ってみたとき、前述のTV番組がふと頭に思い浮かんだのである。

さて、本書には「田中館愛橋と原敬たなかだて あいきつが描いた未来」という副題がつけられている。明治時代に入り、日本が世界に追いつくには近代化が欠かせない。そのためには度量衡制度をメートル法を主体としたものにする必要がある。ということで、日本の度量衡法の主たる単位系を尺貫法からメートル法に替える法改正に献身的な貢献をしたのが田中館愛橋なのである。本書には彼の功績が仔細に描かれている。

著者は、田中館愛橋の生涯や業績をそのまま記述するという方法はとらなかった。度量衡制度はその国の社会的基盤をなすものだから、その国の置かれた歴史的・社会的背景の説明は必要不可欠と考え、こうしたものを盛り込んだドキュメンタリー小説とすることにした。そのための語り部として、愛橋と同郷で藩校同級生の

政治家原敬を登場させることにしたのだ。

本書は第1章「回想」から第9章「それから」までの9章立てになっていて、第1章には、明治以降、現在に至るまでの日本の度量衡制度の変遷の概略と田中館愛橋とのかかわりが記されている。また、愛橋と原敬(幼名、健次郎)との出会いについても触れている。

本書によれば、日本では、1868(明治元)年、松平春嶽により度量衡の単位系統一が提案され、1921(大正10)年にようやくメートル法を基本とする度量衡法が制定された。この間、日本は、1885(明治18)年にメートル条約に加盟している。思えば、現在では、長さの基準は、メートル原器ではなく、光の波長を元にしたものに置き換えられている。

著者は、「岩手という地のローカルな人物誌を描きたかったのではなく、戊辰戦争後の逆境にあっても日本の未来を描き続けた男たちの姿を述べたかった」と、あとがきに記している。

「一人の偉人の生涯と業績を調べ、その歴史的事実だけを記すのであれば、ほんの数行で足りてしまう」という趣旨のことも述べている。

日本の度量衡制度をメートル法を主体としたものにするために尽力した田中館愛橋なる人物を、冒頭で触れたTV番組に登場させ、異分野の専門家を招いて、それぞれの立場から、彼の業績について論じてみてはどうか。などということを考えるのは書評子一人だけであろうか。

巻末には、本書の内容を理解するための参考資料として、関連する文献が数多く紹介されている。あわせて、田中館愛橋および原敬が生きた時代の年表もつけられている。(金子政彦)

楽しく取り組んだ思い出

元産業教育研究連盟会員
小池 一清

■ 植物観察大好き



新入生歓迎会にて
(筆者は後列左から2人目)

小生は、1953(昭和28)年に東京学芸大学に入学し、サークル活動として「植物観察会」に入会した。これがきっかけで、植物への関心が深まった。

このサークルの新入生歓迎会を、神奈川県藤沢市にある江ノ島の植物園で開いてくれた。ここで数々の植物を観察し、花の色や葉の形の違いなど、あるいは、それらの比較ポイントなどについて、顧問の末松先生や先輩方からご指導を受けた。

夏休みに北海道の大雪山国立公園へ出かけることになった。東京の上野駅から夜行列車に乗り、終点青森駅で深夜の青函連絡船に乗り換え、翌朝、函館港に到着した。ここで函館本線の列車に乗車し、上川駅で下車した。ここで北海道出身の先輩から米を受け取り、各自が配分を受けた。その後、宿泊予定の層雲峡観光ホテルに移動し、ホテルに荷物を置き、層雲峡で有名な2つの滝の見学に出かけた。その滝とは「流星の滝」と「銀河の滝」である。大自然の中で雄大な姿をそれぞれ自己表現する素晴らしい姿の滝であった。旅の中でホテルに宿泊したのはこの1回だけである。



大雪山国立公園参加者

翌朝、ホテルを8時30分に出発し、午後1時30分、大雪山の黒岳に到着。ここの山小屋、黒岳石室に宿泊。食事は、各自が持参した飯盒でご飯を炊いたり、みそ汁を作ったり

するなど、いわゆる自炊方式で朝食を済ませた。

次の日は、北海岳、白雲岳、烏帽子岳を巡回した。各地で観察できた高山植物は、たとえば、ヨツバシオガマ、チングルマ、コマクサ、ミヤマリンドウなどである。それらが集団で咲く見事な姿は、言葉で言い表せない荘厳な美しさである。この楽しい体験が味わえるがために、どんなにつらい山でも、あるいは、雨や風の日でも、何度でも出かけたくなくなってしまうのである。

さて、翌日は、北鎮岳、旭岳を経て営林署勇駒別宿舎の白雲荘に宿泊。ここには温泉があり、心も体もゆっくり休めることができた。その翌日、松山温泉へ午後4時頃に到着。この日は北海道大学旭川分校の学生寮に一泊お世話になった。

さらに、北海道阿寒国立公園へも足を延ばした。旭川駅から石北本線で北見駅へ向かった。ここからバスで阿寒湖畔に移動。阿寒湖には水中で生息する糸状緑藻がピンポン玉状に育つ、阿寒マリモが有名である。船で行かないと観察できないとのことであった。しかし、温泉街のお店で現物を観察することができた。この夜は、無人の土木工事の小屋で一泊お世話になった。このとき、深夜0時過ぎに起きて実行する計画があった。それは雌阿寒岳に登り、ご来光を拝むことであった。幸い良い天候に恵まれ、目的を達成することができた。大いに感動する貴重な経験を味わえた。

■ テレビ受信機の組立

1954(昭和29)年、小生が大学2年生のとき、東京に住む叔父から「お前に10万円の研究費を出す」と言う話があった。「この費用でテレビ受信機を組み立て、綺麗に映るものができたら、俺のところへ持って来てくれ」と言うことだった。この話のあった前年の1953(昭和28)年2月に、テレビの本放送がNHKから始まったばかりの時期であった。

さて、小生は、高校生時代、趣味でラジオ受信機を組み立てた経験があった。そこで、実際に組立キットを販売している店に伺いに行った。お店の人の言うには、「ラジオを組み立てた経験があれば大丈夫です」とのことだった。ラジオと同じ働きをする音声回路だけを組み立てれば大丈夫だからというのがその理由であった。

実際に、三鷹無線社のキットを買い求め、組み立てを始めた。組み立てが終わった後、すぐに映像が映るものではなかった。説明書を丁寧に読み、調整を繰り返した。その結果、見事に綺麗な映像が映るようになった。その瞬間は全くの初体験であり、「オオ、ヤッター!!」と声をあげたくなるほど、体が震えるような大感動であった。

後日、完成したテレビ受信機を叔父の家に届けたところ、髪の毛の1本1本までがとても綺麗に映るということで、大好評をいただくことができた。このテレビは、ブラウン管14インチであった。当時、店頭では14インチのテレビ受信機は普通のサイズで、一般的には15万円前後で販売されていた。

こうした組み立て体験は、大学の卒業論文の作成に発展していった。

コメをめぐる話題

—最近のコメ関係の新聞記事から—

藤木 勝

業者間取引価格は60キロあたり



図1

令和2年産米 買取価格が決定いたしました

令和2年産米買取価格について下表のとおり決定いたしましたので、ご案内いたします。今年度につきましてもJAならけんでは、買取販売方式で、お米を買取りさせていただきますので、よろしくお願いたします。

○買取価格+持込奨励金(200円/60kg)

令和2年産米を検査及び集荷場所まで持込み頂いた生産者の方に対し、持込奨励として、200円/60kgを加算してお支払い致します。但し、飼料用米・米粉用米・くず米は対象外となります。

(単位: 円/60kg、消費税込)

銘柄	1等	2等	3等
ヒノヒカリ	13,500	13,000	12,500
コシヒカリ	13,600	13,100	12,600
あきたこまち	13,200	12,700	12,200
ひとめぼれ	13,200	12,700	12,200
キヌヒカリ	13,100	12,600	12,100
その他うるち	11,400	10,900	10,400
その他もち	11,000	10,500	10,000

注: JAの指定する検査及び集荷場所は、最寄りの営農経済センターへお尋ね下さい。
注: 米買取代金支払時に買取価格と持込奨励金を標記します。

○買取価格【持込奨励金(200円/60kg)除く】

(単位: 円/60kg、消費税込)

銘柄	1等	2等	3等
ヒノヒカリ	13,300	12,800	12,300
コシヒカリ	13,400	12,900	12,400
あきたこまち	13,000	12,500	12,000
ひとめぼれ	13,000	12,500	12,000
キヌヒカリ	12,900	12,400	11,900
その他うるち	11,200	10,700	10,200
その他もち	10,800	10,300	9,800

注: 等級間格差は1-2等は▲500円/60kg、1-3等は▲1,000円/60kg
注: 買取期間 令和2年12月18日(金)まで
注: 上記価格は、買取価格ですので追加精算はございません。
注: 醸造用玄米「露葉風」につきましては、決定後にご案内いたします。
注: 検査後「令和2年産米 買取明細及び精算書」を送付いたします。

ご不明な点がございましたら、最寄りの営農経済センターにお問い合わせください。

お米は全量 JAならけんへ!!

図2

新米の出回る時期になると、新聞でも米に関わる記事が掲載される。そして、私にとっては、亡き母が「百姓が米を買おうようになったらおしまいだな」とぼつりと言った言葉が思い出される時期でもある。そこで、本稿では、あまり多くは記せないが、最近の新聞記事の中で印象に残っている、コメに関係するもの(抜粋)をいくつか紹介する。

■ 米価 6年ぶり下落

これは、本年(2020年)10月17日付の朝日新聞に掲載されていた記事の見出しである。その記事には「農林水産省が公表した2020年産米(9月)の業者間取引価格は、60kgあたり平均15,143円で、前年より676円下がった(図1)。(中略)小売店でも値下がりが見られる。この数年、コメの国内消費量は年間10万トン前後のペースで減り続けているが、生産量も天候不順などで減り、価格は上昇基調が続いていた。しかし、今年は作柄が比較的良かったことや、コロナ禍で外食産業の需要が落ち込み、在庫が積み上がったことが、値下がりにつながった」と記され、米の生産と価格を巡る各界の意見が述べられている。

ところで、公表値は玄米(1等米)の場合で、価格には運賃・包装費・消費税相当額を含んでいると考えられる。また、地域や流通経路によっても、価格は異なる。たとえば、図2はJA奈良のデータ¹⁾である。

参考までに記しておく、「米の取引価格について」と題する農林水産省公表の資料(2009年3月発表)²⁾によれば、米の消費者物価指数(小麦製品を含めた食料品価格が上昇する中で、米は安定的に推

移している)、米の取引、品種別価格等が記されている。

■ 水没 収穫は半分

これも、本年10月6日付の朝日新聞1面中央にあった記事の見出しである。この記事には、熊本県を流れる球磨川くま近くの被災地、熊本県球磨郡相良村の稲の刈り取り写真(稲刈り機が斜めに横切っている)が添えられている。1年かけて育てた稲をどんな思いで刈り取ったのだろうか。

ところで、粳100gを玄米にすると、粳殻分として20%減の80gに、さらに白米に精米すると、糠や胚芽分が減じて72gになる(目安)。ご飯茶碗1杯に相当する白米(精米)の重さは約65gである。炊飯すると約2.3倍の重さになるので、約150gになる。おにぎり1個(100g)では、白米(精米)約43gにあたる。仮に、コシヒカリ(精米)5kgが2,500円とすると、ご飯茶碗1杯にかかる白米(精米)の費用は約33円、おにぎり1個にかかる白米(精米)の費用は約22円となる。近所のスーパーマーケットでは、低価格の白米(精米)は2kg850円くらいで、高価格の白米(精米)で1,200円くらいで、それぞれ販売されていた。ご飯茶碗1~2杯で空腹が満たされるのだから、米(米飯)は大変安い。生産者のことを思えば、むしろ安すぎるのではないか。

参考までに、東海農政局生産部長の浦田高宣氏が「米の需給、価格及び流通について」と題して名古屋大学で行った特別講義(2015年8月31日実施)³⁾を紹介すると、1960(昭和35)年からの米の需給状況、水田耕作面積の変化や政策の変遷等が述べられている。

■ 「大槌復興米」を育てる小学生

岩手県大槌町おおつちの菊池妙さんたえ(79)宅に、一足先に新米が届いた。実は、この米が育てられたのは750km離れた大阪なのだ。そのルーツは、菊池さんが東日本大震災の年の秋に見つけた3株のイネとのこと。津波で自宅を失った菊池さんは、玄関だった場所でやせた稲穂を見つけた。翌春、地元有志らが433粒の種もみから苗を育て、「大槌復興米」と呼ばれるようになった。自治体ぐるみで支援してきた大阪府富田林市のボランティアたちが、震災の3年後、1kgだけ譲り受け、JAとともに市内の水田で栽培し、翌年からは市内すべての小学5年生が一人1個のバケツで育て始めた。菊池さんのもとには、子どもたちから「観察日記」が毎年届くという。菊池さんは「本当に幸せなお米さん」と言う。どこからか流れ着いた種もみが根を張り、人と人との縁で育まれた。

本年10月19日付の朝日新聞「天声人語」に載っていた話である。

■ 米の相場と旗振り通信

今年(2020年)10月1日、東京証券取引所でシステム障害が発生して相場情報の配信ができなくなり、すべての売買が終日停止になるというはじめての事態が起きた。その翌日、つまり10月2日付の朝日新聞「天声人語」に、これに関連した内容の記事が

掲載された。その一部を抜粋する。

「江戸時代、大坂堂島の米市場は全国の米価に影響を与えた。相場情報を各地に伝えるための最も速いやり方が、旗振り通信だった。見通しのいい山から山へ旗を振って数字を伝え、情報のリレーをする。明治に入ってからも続いた。(後略)」

この記事の内容に関して、次のことを付記しておく。戦前の卸売米価をリードしたのは、東日本では東京・深川正米市場(1886(明治19)年の成立)、西日本では大阪・堂島市場であった。東京へは東北・関東・北陸を主産地とする米が、大阪には中国・四国・九州・北陸方面の米が集中するようになった。

<参考文献>

- 1) <https://www.ja-naraken.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/08/d8cad9d0b6c27c637457556b17831f29.pdf>
- 2) https://www.maff.go.jp/j/nousei_kaikaku/n_kaigou/05/pdf/data2.pdf
- 3) https://www.maff.go.jp/tokai/kikaku/renkei/pdf/270831kougi_koumenojyukyukakaku.pdf

~~~~~ メーリングリストの積極的な活用を ~~~~~

会員の皆さん、メーリングリストの産教連ネットを活用していますか。今や、インターネットの利用は当たり前の時代になっています。「最近、図書館でこんな本を見つけましたが、ご存じでしたか?」「こんな情報を入手したのですが、どなたかもっと詳しいことを知りませんか?」などということを産教連ネットへ載せることで、情報交換の輪が広がることもあります。

産教連ネットに情報を発信することが活用の第一歩となります。この産教連通信でも、随時、産教連ネットへ発信された情報を編集し直して紹介しています。本号にも「会員からの便りを紹介します」というタイトルで掲載していますので、参考にしてみてください。

産教連ネットへの登録に関しては、まずは事務局(最終ページに連絡先記載)へご連絡ください。

■ ある目的で腐葉土を集める

……………2020年9月17日

現在の住まいの近くに、木々が無断で伐採された場所(山)があります。その事実の裏づけも兼ねて、その場所の腐葉土を集めました。

先日は、件の場所で、朝から夕方まで作業しました。その手順は次のようなものです。



写真1



写真2

①一辺が 3.16m の正方形(10㎡)に紐を張る(写真1)。

②紐を張った枠内の腐葉土をかき集める。

③混じっている枝や緑葉を取り除く。

④袋に入れる(写真2)。



写真3



写真4

その結果、10平方メートルに腐葉土が1660あったので、1㎡あたり約 160の腐葉土があることが確かめられました。市販されている腐葉土の値段は 600円ほど(16L入り)です(写真3～写真5)。したがって、伐採場所の

1㎡あたりの腐葉土の値段が約 600円となります。伐採面積が 2000㎡だとすると、伐採された山全体の腐葉土の値段はおよそ 1,200,000円となります。つまり、腐葉土流出の損害金が 1,200,000円と算出できます。

今は山に行く人はいません。腐葉土と称する製品のなかには、原料もさまざまあるようです。

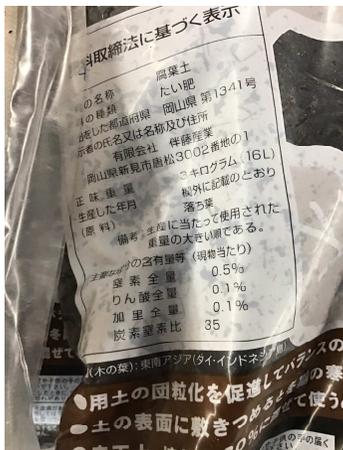


写真5

□ 会員からの便りを紹介します—古墳時代の鉄器を目にして

新型コロナウイルスによる感染の終息が見通せないなかで、会員はどう過ごしているのでしょうか。最近の産教連ネットに発信されたものの中から選んで紹介します。

先日、倉敷考古館の見学をしました。^{かなくらやま}金蔵山古墳からは鉄製の道具が多数出土しています。これより 200年後の飛鳥時代には、日本人が自ら工夫した道具で法隆寺を建造しました。製鉄技術の進歩と自分で考えて作る技術が飛躍したことが分かる展示でした。

右下の写真は槍ガンナを拡大したものです。これを見ると、教科書にも載っている槍ガンナの前身がわかります。

鉄釘を使ってナイフを作る実践は、技術の進歩を追体験するものと言えます。若い先生方にも薦めたいですね。

(岡山・赤木俊雄)

赤木先生、槍ガンナの前身と思われるのは右の写真右側の三角形状にとがって両刃になっているところでしょうか。左側の鉤上の部分は何でしょうかね。けびきの前身なのかなあ。

もう少し説明があるとありがたいです。(東京・藤木勝)

藤木先生の指摘されたものは鎌です。直線状の刃を柄に縛った(差し込んだ)ものです。もしかして、場所が違っていたとしたら、鉞先です。(岡山・赤木俊雄)



□ 常任委員会が行われました

今年(2020年)は、コロナ禍の関係で、全国大会は実施しませんでした。8月下旬に常任委員会を行い、必要なことを討議しました。この場で話し合われたことの中から、いくつかお知らせします。

* 産教連の代表者(委員長)の交代について

沼口博さん本人から辞任の申し出があったので、それを了承したうえで新たな代表者を選任した。その結果、鈴木賢治氏(新潟大学)にお願いすることになった。

* 70周年記念誌の刊行について

前号(産教連通信第234号)でも紹介したように、1949年に発足した産教連は、設立から70年を迎えている。この節目に、これまでの研究活動の成果をまとめるべく、記念誌の発行を計画し、来年(2021年)夏の刊行をめざして準備を進めている。この記念誌は500ページを超えるものになる見通しである。

* 産教連の研究活動の成果の電子データ化について

機関誌(「技術教室」あるいは「技術教育」)の電子データ化はすでに完了し、産教連のホームページ上で公開されている。あと残っているのが、自主テキスト(全12冊、すでに絶版)の電子データ化と産教連通信のうち未データ化^註のもの電子データ化である。

註：2008年10月17日発行の第175号以降は電子データ化されている。

「技術教室」「技術教育」全号公開

産教連が編集していた「技術教室」誌が休刊となってから9年余りが経過しました。この間、新潟大学教育学部の鈴木賢治氏および同学部技術科の学生の尽力により、「技術教室」ならびに「技術教育」の公開版が完成の運びとなっています。技術教育・家庭科教育の実践・研究に大いに役立つものと期待されます。産教連のホームページからアクセスできますので、活用をお勧めします。(編集部)

□ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をどしどしお寄せください。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。お待ちしております。

さて、すでに何回かお知らせしていますように、今夏の大会は取りやめとなり、それにあわせて連盟総会も開催延期となっています。関連して、会計年度も次の総会まで同一年度として扱うことにしています。**これまでの会費が未納の場合は、会費納入をよろしく願います。**

また、人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、ご面倒でも、すみやかに事務局までご連絡ください。また、メールアドレスの変更についても、同様に連絡をお願いします。

編集後記

世界の新型コロナウイルス感染者はすでに5000万人を超え、感染が終息するどころか、感染者数は増加傾向にあるとのことです。これから空気の乾燥する冬へ向かい、ウイルスが増殖する環境が整うため、感染拡大をおさえる対策が急務となります。

そのようななか、最近、少人数学級の実現と学校における働き方改革の推進を求める全国集会が行われたとのことです。コロナ禍の今、現行の一学級40人は過密過ぎるゆえに減らすべきであると文部科学省も同調しています。教育界も少人数学級の実現を長年にわたって要望してきました。ところが、財務省は強硬に反対しているようで、その実現へ向けてのハードルは高く、残念でなりません。

一学級の人数がこれほどまでに多い国は諸外国には見られません。一学級の人数を減らすべきだとの認識が教育関係者以外にはあまりないことも、少人数学級の実現へ向けての動きが鈍い原因の一つになっているのではないかと考えてしまっていて、しかたがありません。
(金子政彦)

産教連通信 No.54 (通巻 No.235)

2020年11月20日発行

発行者 産業教育研究連盟

編集部 金子政彦 〒247-0008 神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13
☎045-895-0241 E-mail mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局 野本恵美子 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21
☎045-942-0930

財政部 藤木 勝 郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部